

葵卷の『長恨歌』と和歌

——葵上・六条御息所と「長恨」——

藤河家 利 昭

初めに

葵上が亡くなって源氏が左大臣邸から去った後、左大臣が源氏の手習を取って見る場面がある。

御帳の前に御硯などうち散らして手習ひ棄てたまへるを取りて、目をおししほりつつ見たまふを、若き人々は、悲しき中にもほほ笑むあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつつ、草にも真字にも、さまざまめづらしきさまに書きまぜたまへり。「かしこの御手や」と空を仰ぎてながめたまふ。他人に見たてまつりなさむが惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜華白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく
夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れてまじれり。

(葵二・六四(注¹)五)

源氏は、心に沁みる昔の詩文や和歌を書きすさんだ中に、『長恨歌』の詩句に連作という形で和歌を詠んでいる。このことについては、中西進氏が、白詩引用の意義を述べた上で、「とくにそれを感じさせるものが、いわゆる句題和歌のごとき引用であつたのは、和歌がすでに独自の表現様式を確立したジャンルとして存在していたからだと思われる」(注²)とその重要性を指摘されている。また『源氏物語』における『長恨歌』の引用については、「失はれた愛に對する歎き」を主題としこれを盛上げてゆく手法」(注³)、「光源氏

をめぐる宿世はそもそもこの「長恨」によつて握られてゐるのだということを忘れさせずに、作者は「長恨歌」に對したのである^(注4)というように源氏の側の問題として捉えられてゐる。葵巻についても、「葵の上の死はそれほどに大きな事件だったのであり、更衣を引きつぐ引用^(注5)「長恨歌」の引用）の路線の中に、読者を誘おうとするものであつた^(注5)。「長恨歌」の引用によつて、彼女^(注6)（葵上）に對する鎮魂を終えたと書き手は考へて、つぎの紫上との新枕の記事へ筆をすすめる、ということだろう^(注6)と説かれてゐる。本稿では、右の「長恨歌」に詠まれた和歌について、源氏の亡き葵上追慕の心が向かう方向とともに、源氏と深く関わつた葵上と六条御息所の二人の女君の側から『長恨歌』引用の跡をたどり、葵巻の物語の意義について考へたい。

一、『長恨歌』の詩句と和歌

「旧き枕故き衾、誰と共にか」と「霜華白し」は、『長恨歌』の「鴛鴦の瓦は冷たくして霜華重し 旧き枕故き衾誰と共にせむ^(注7)」に拠る。中西進氏は、「旧き枕故き衾、誰と共にか」と「亡き魂ぞ」の歌との關係について、「この肉体的な箇所引用に對して和歌が魂を問題とする^(注8)」として、「おそらくこの相違は、意圖的に行なわれたものであらう。

詩と歌とが本質的にもつ相違に、『源氏物語』の作者は敏感だつたのではないか。その上で詩と歌との交響を、ごく自然な形で行なつたのだと思われる^(注8)と述べられる。「詩と歌とが本質的にもつ相違」に帰せられる面もあると思われるが、この葵巻の物語に固有の問題として考えることが求められるであらう。両者の關係を見ると、表現上、「旧き枕故き衾」と「寝し床」との関連がある。一方、内容は、前者が、共寝をする相手のいない悲しみであるのに對して、後者は、源氏が自らの「あくがれがたき心ならひ」から、葵上の「亡き魂」が共寝の「床」から離れがたいであらうことを悲しむものである。両者の關係は、それぞれ残された者と亡くなつた者の悲しみを述べて対応させたものと見ることが出来る。しかし、「旧き枕故き衾、誰と共にか」という相手のいない悲しみに立つて、自らの「あくがれがたき心ならひ」からとはするものの、「亡き魂」が共寝の「床」を離れがたいであらうことを悲しむのはどのような理由があるのだらうか^(注9)。

次に、「霜華白し」から「君なくて」の歌へは、「霜華白し」から「常（床）夏の露」への展開がある。「重し」を「白し」としたのは、このような対応を考へたのであらう^(注10)。前者は、玄宗の、楊貴妃との睦まじい仲が失われた悲しみ

であるが、後者は、源氏の、葵上を亡くした独り寝の悲しみである。前の詩句と和歌との組み合わせと同様に、故人の亡き後、時の経過がある。「君なくて」の歌は、躬恒の「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこなつの花」(古今集 卷三・夏)の歌をふまえ、その「妹とわが寝るとこなつの花」、即ち共寝の床を、独り寝の床へと転じたものである。「床」と「常夏」を掛けることで「床」への愛着はより深まると考えられる。ここでは掛詞という和歌の方法が重要な役割を担っている。また「君なくて」の歌は、独り寝の寂しさを歌う内容からすれば、むしろ「旧き枕故き衾」の句と対応すると思われるが、「霜華白し」と対応させたのはどのような意図があるのだろうか。^(注11)

『長恨歌』の引用、或いはその内容をふまえて和歌が詠まれるという点では、桐壺巻とも関連性がある。そこでは「このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ」(二・三三)とあり、『長恨歌』の絵に書かれた和歌や漢詩に基づいて帝が歌を詠んでいる。帝は、亡き桐壺更衣の里邸から持ち帰られた形見の品を見て、「尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」(三五)と、『長恨歌』

の方士が楊貴妃の魂に逢ったように、更衣の「魂のありか」を捜し当ててくれれば、と願う。しかし、「朝に起きさせたまふとても、明くるも知らでとおぼし出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり」(三六)と、『玉簾あくるも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや』という伊勢の歌のように、夢にも逢えないことが、朝政を怠り、それがさらに「人の朝廷の例まで引き出で」という事態になっていく契機となっている。伊勢の歌の引用は、結局、帝の願いのように「魂のありか」を捜し当てることができなかったことを示している。^(注12)むしろそのことが、方士が楊貴妃の魂に対面することの発展として、形見としての源氏や帝の心を慰める藤壺宮を登場させることになったと考えられる。しかし、この葵巻では、「亡き魂」については、源氏は自らの「あくがれがたき心ならひ」から、「亡き魂」も共寝の「床」を離れたいであろうことを悲しむ。また次の歌では、反対に源氏は亡き葵上に独り寝の床の悲しみを訴えているようである。「亡き魂」と源氏は、生死を越えて、共寝の「床」に執することで二人の絆の強さが示されたと言えるであろう。少なくとも桐壺巻の帝のように、魂に逢えない嘆きではないのである。

『長恨歌』の詩句をふまえて和歌を詠む先蹤としては、よ

く知られているように『伊勢集』がある。^(注15)この先の二首について、作者には伊勢に対抗する気持ちがあったと言われている。^(注16)『伊勢集』の『長恨歌』の詩句をふまえて詠まれた和歌は十首あり、初めの五首は帝、後の五首は後の心になつて詠まれている。いずれも楊貴妃亡き後のことであり、帝の歌は、楊貴妃追慕の悲嘆を、後の歌は、それに応える形で、帝と住む世界を異にする悲しみを述べたものである。『伊勢集』の歌は、基本的には『長恨歌』に沿った内容である。和歌の特徴として景と情を一体のものとして捉え、和歌独自の表現によつて『長恨歌』を離れる部分も見られる。しかし、最も大きな特色は、幽明境を異にする二人の悲恋物語という形式をとつたことであらう。これは『長恨歌』自体の構造にも基づいている。葵巻の『長恨歌』引用詩句は『伊勢集』ではふまえられていない。ただ、源氏の和歌二首において、『床』を共通の題材として、源氏が床を離れた『亡き魂』の悲しみを思いやり、それに対して残された源氏が独り寝の床の寂しさを訴えるのは、『伊勢集』の形式に倣つたとも言える。しかし、二人の間は、生死を別にしても住む世界を異にするのではなく、互いに床に執することでの世を離れてはいない。

特に、『伊勢集』の「玉簾あくるも知らで寝しものを夢

にも見じとゆめ思ひきや」の歌は、上句が「春宵は短きを苦しみ日高くして起く」によるが、これは源氏の歌の「寝し床のあくがれがたき心ならひに」を思わせる。また下句は「魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」という楊貴妃亡き後の玄宗の嘆きによる。このように楊貴妃の生前と死後とを対比させたのは、源氏の歌で、源氏の床から離れがたい気持ちを述べた葵上生前のことに基づいて、現在の亡くなった魂の悲しみを述べるのと類似している。しかし、伊勢の歌では、『伊勢集』が基本的に『長恨歌』と想を一にして、住む世界を異にした二人の悲恋を主題としているため、魂は夢の中にも現われないのである。直接「亡き魂」のことを悲しみ、また亡き葵上に訴えているように見えるのとは大きく相違する点であらう。

『大式高遠集』では、或る人が『長恨歌』の詩句を題にした歌十首を詠んできたのに対して、高遠が十六首を詠み加えてやつたものである。これは『長恨歌』全体から順を追つて詩句を選び、それを題として歌を詠んだものである。これもほぼ帝と後の心で詠んだものであるが、大部分楊貴妃亡き後のことである。或る人の歌は、前半五首が、楊貴妃が深窓に在ることから、玄宗が亡き楊貴妃の姿を偲ぶところまで、後半五首がその魂を尋ねるところから、尽きぬ恨

みを述べるところまでである。それに対して作者の十六首は、終わりの三首が蓬萊宮でのことを詠んだものである外は、大部分が、玄宗が楊貴妃の死を悼むものである。『高遠集』も、基本的には『長恨歌』の詩句に沿った内容であるが、より和歌独自の表現・発想によって『長恨歌』から離れるところがある。

葵巻にも引かれた「旧枕故衾誰与共」に対しては、「うちわたり独り臥す夜の宵々は枕寂しき音をのみぞ泣く」とあり、「音をのみぞ泣く」の部分が離れる程度でほぼ題に沿っている。これは、むしろ源氏の「君なくて」の歌の方と内容の上では近い。ここでも『伊勢集』と同様に、楊貴妃が夢の中にも現われることはない。ただ、「九華帳裏夢魂驚」に対して、「うたたねの覚めての後の悔しきは夢にも人を見さずなりけり」と詠まれているのを見れば、玄宗の夢は見ていたものと考えられる。一方、「聖主朝暮之慕情」に対して、「朝夕に偲ぶ心のしるしには天翔けりても君が知らなむ」と、天を翔ける魂に訴えている。また、「夕殿蜚思悄然」に対して、「思ひあまり恋しき君が魂と翔ける蜚をよそへてぞみる」と、楊貴妃の魂を「翔ける蜚」によそえる。このように亡き楊貴妃に玄宗が悲しみを訴える点では、「君なくて」の歌に近いところもある。しかし、

源氏の「亡き魂ぞ」の歌のように、直接亡くなった魂の心を思いやるのとは異なっている。^{〔注17〕}

このように見ると、葵巻のように、生死を越えて「亡き魂」の心を思つて悲しみ、また死者に悲しみを訴えるようなことは、『長恨歌』及び『伊勢集』等には見られない。特に「亡き魂ぞ」の歌は、自分と同様に、いまだ魂が共寝をした床を離れがたいのを悲しむのであつて、源氏は、自らの「心ならひ」からとはするものの、魂が生前の心を持ち続けて源氏に執着を留めているであらうと見ている。また「亡き魂」と、生きている自分と同じ思いを持っているものとして向き合っていることになる。いわば生死を別にしても、心は一つに繋がっているのである。「あくがれがたき」は、「床」から離れがたいのであるが、魂も「あくがる」ものであり、魂のこととしても重なってくる。一方、『長恨歌』では、この歌が題にした句を含む「鴛鴦の瓦は冷たくして霜華重し 旧き枕故き衾誰と共にせむ」は、この句のすぐ後で、方士が楊貴妃の魂を捜しに行つて対面することになっている。葵巻の場合は、その変形と見ることもできるが、「亡き魂」また亡き葵上と源氏との一体感を互いに「床」に執するとすることでこの世の側において示そうとするのは葵巻独自の設定である。次に、それぞれの

詩句と歌とが物語の主題・展開をどのように担っているのかを見ていきたい。

二、「亡き魂ぞ」の歌と劉禹錫「嗟く所あり、二首」及び「高唐賦」の引用

「亡き魂ぞ」の歌のように、亡き葵上の魂と源氏との関係を述べたものとして、源氏と頭中将が亡き葵上を偲ぶ場面を見ておきたい。

時雨うちしてものははれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて頬杖つきたまへる御さま、女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかしと、色めかしき心地にうちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさしなほしたまふ。これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞ

する。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ

行く方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ

(葵二・五四〜五)

源氏の独り言、「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」は、劉禹錫の「嗟く所あり、二首（七言絶句）」一首目の第四句（後に引く『文選』高唐賦「旦には朝雲と為り暮べには行雨と為らん」による）を直接引いたものである。

庾令樓中に初めて見し時

武昌の春柳は腰肢に似たり

相逢ふも相笑ふも尽く夢の如し

雨と為り雲とやなりにけん今は知らず

鄂渚濛々として烟雨微かなり

女郎の魂暮雲を逐ひて帰る

只応に長しへに漢陽の渡りに在りて

化して鴛鴦一隻と作りて飛ばん

（『全唐詩』一二二）

頭中将と源氏の歌もこの句に基づいて詠まれ、「浮雲」と「雲居」は亡き葵上を偲ぶよすがとなるものであるが、葵

卷の場合は時雨のために眺めることはできない。「風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して」と、時雨が涙を誘うものしている。これを受けて、源氏の歌では、時雨によって「雲居」が「かきくらす」だけでなく心をも暗くするものとしている。

劉詩一首目は、女の魂の行方が知れないことを嘆くが、二首目は、「女郎の魂」が帰り、「鴛鴦一隻」となつて飛ぶであろうとする。これに對して、独り言のように亡き葵上の魂の行方が知れないことを嘆く三位中将の歌と、それに和して魂が昇つた空を眺めることができなことを悲しむ源氏の歌は、劉詩二首の対応の仕方に似るが、内容はいずれも魂の行方を知らない嘆きである。

「女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」は、劉詩二首目、「女郎の魂暮雲を逐ひて帰る」によると見られるが、劉詩の方は、「高唐賦」に基づき、女が作者の嘆きに應えて帰つて来るのであらう。「見棄てて亡くならむ魂」が源氏に執着心を留めるであらうとは中将が思つたことであるが、先の源氏が、「亡き魂」が「床」を離れがたいとすることと関連していると思われる。なお劉詩二首目の「化して鴛鴦一隻と作りて飛ばん」は、先の『長恨歌』引用詩句に関わる「鴛鴦の瓦は冷たくして霜華重し」

と呼応すると考えられる。しかし、「鴛鴦」の持つ意味は、前者は、将来番いとなることを予想させるのに對して、後者は、現在の孤独を象徴するものである。

次に、劉詩が扱つた『文選』『高唐賦』との関係を見ておく。

昔者、楚の襄王、宋玉と雲夢之台に遊び、高唐之觀を望む。其の上に独り雲氣有り。卒く直に上り、忽ちにして容を改めて、須臾の間に變化窮り無し。王、玉に問ひて曰はく「此れ何の氣なるや」と。玉對へて曰はく「所謂朝雲といふ者也」と。王曰はく「何をか朝雲と謂ふ」と。玉曰はく「昔者先王嘗て高唐に遊ぶ。怠りて昼寝ぬ。夢に一婦人を見る。曰はく『妾は巫山の女也。高唐の客と爲る。聞く、君高唐に遊ぶと。願はくは枕席を薦めん』と。王因つて之を幸す。去りて辭して曰はく「妾は巫山の陽、高丘の阻しきに在り、旦には朝雲と爲り暮べには行雨と爲らん」と。朝朝暮暮、陽台の下に旦朝之を視ること言の如し。故に爲に廟を立て、号けて朝雲と曰ふ」と。〔文選〕卷十九、宋玉源氏と頭中将を、それぞれ「楚の襄王」と「宋玉」に擬していると思われる。「高唐賦」では、「巫山の女」の言つた通り「朝雲」を朝毎に見ることができると對して、

中将と源氏の歌では、先述のように「浮雲」・「雲居」を亡き葵上を偲ぶよすがと思うが、それは時雨のために眺めることができない。葵巻では、朝ではなく「時雨うちしてもあはれなる暮つ方」に設定されているのは意図があろう。

「巫山の女」は、「先王」に「枕席を薦め」、即ち夜の伽を勧め、王もそれを容れて伽に侍らせている。なおこの「枕席」（枕と敷物、寝床）は、「旧き枕故き衾」、さらに源氏の歌の「寝し床」、「床（常夏）」を導いていると考えられる。

このように右の場面は、劉詩や「高唐賦」によつて構成されているが、亡き葵上の魂は「鴛鴦一隻」となつて飛ぶこともなく、また朝毎に「朝雲」となつて現われることもない。亡き葵上の魂の行方を遂に知り得ないのである。しかし、中将が、「女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」と、亡き葵上の魂が源氏に執着して留まると見ていることは、後の源氏の歌で、「亡き魂」が共寝の床を離れがたいとすることの前提となつていのではないかと考えられる。

三、「君なくて」の歌と「常夏」・「なでしこ」

「君なくて」の歌は独り寝の悲しみを訴えるが、これは次のような左大臣邸における源氏の様子に基づいていると見

られる。

夜は御帳の内にひとり臥したまふに、宿直の人々は近うめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたるかぎり選りさぶらはせたまふ念仏の曉方など忍びがたし。

（五〇〜二）

源氏が勤行を熱心にして、日を暮らしている頃のことである。独り寝が寂しくて、物悲しい秋に死に別れたのでよけいに亡き葵上が恋しくて寝覚めがちであるというのは、この歌の独り寝の悲しみとも通じている。

深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、
とからはぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、

（五二）

また、先の場面が続いて、深い秋の物悲しさがましていく風の音が身にしみると思つて、慣れぬ独り寝に夜を明かしかねているともあり、歌の内容と通じる。ただ歌の方は、躬恒の「塵をだに」の歌に基づいているので「床」と「常夏」即ち亡き葵上に対する愛着が強い。

歌の後に、「一日の花なるべし、枯れてまじれり」とあるが、この花は、「なでしこ」（若君）をめぐつて源氏と大宮との間に交わされた贈答歌に因むものである。「常夏」

と「なでしこ」とを同一の花と見てることになる。

枯れたる下草の中に、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて、中將の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る

匂ひ劣りてや御覽ぜらるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑顔ぞいみじうつくしき。宮は、吹く風につけてだに木の葉よりけにもろき御涙は、まして取りあへたまはず。

今も見てなかなか袖を朽たすかな垣は荒れにし大和なでしこ (五七)

源氏は「なでしこ」(若君)を亡き葵上を偲ぶ「かたみ」としてゐる。若君を形見とする例は、他にも「若君を見たてまつりたまふにも、「何に忍ぶの」といにとど露けけれど、かかる形見さへなからましかばと、思し慰む。」(四九)とある。「常夏」と「なでしこ」を同一の花としたことは、亡き葵上を偲ぶ心が、その形見としての若君を慈しむ心に繋がっていることを暗示したものと見る事ができる。

頭中將と常夏の女との間に交わされた贈答歌においても、女が先に贈った「山がつの垣は荒るともをりをりにあはれ

はかけよ撫子の露」の歌の「撫子」(女の子)との関連において、「常(床)夏」が女に喩えられている。

咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。

うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり (帯木一・八二・三三)

「常夏」と「なでしこ」とが同一の花であるだけでなく、それぞれ女とその子を意味するという面でも密接な関連を持つと見てよいであろう。

一方で、「常(床)夏」自体への愛着は、どこに向かうのであろうか。紫上の例を見てみたい。

御前の前栽の何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。 (紅葉賀一・三三〇)

この「なでしこの花」は、源氏と藤壺宮との間に生まれた

若宮を指している。その上で、紫上がこの花に喩えられる。しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる桂姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ、のぞきたまへれば、女君、ありつる花の露にぬれたる心地して添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。

(一・三三二)

ここでは「常夏」は、「なでしこの花」として若宮に喩えられるだけでなく、紫上にも喩えられている。この場合、紫上と若宮は母子ではない。ただ源氏は「なでしこの花」(若宮)を見ながら藤壺宮のことを思っているのであり、紫上はそのゆかりの女君であるという関連はある。紅葉賀巻は葵巻の前巻であり、紫上が「常夏」に喩えられたことからすれば、源氏の「常(床)夏」に愛着する心が紫上との新枕に展開することを示唆していると見ることが出来る。そのことは次のように述べられている。

かくて後は、内裏にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なく面影に恋しければ、あやしの心やと我ながら思さる。通ひたまひし所どころよりは、恨めしげにおどろかしきこえたまひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新枕头の心苦しくて、「夜をや隔てむ」と思しわづらはるれば、いともものうくて、な

やましげにのみもてなしたまひて、「世の中のいとうくおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみ答へたまひつづぐしたまふ。(葵二・七五)

「夜をや隔てむ」は、「若草の新枕头を枕きそめて夜をや隔てむ憎くあらなくに」(注19)『万葉集』巻十一、正述心緒)による。

紫上との「新枕头」は、『長恨歌』引用詩句の「旧き枕」に結び付くのではないか。右の場面の、源氏の紫上への寵愛ぶりは、「春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす」、「三千の寵愛一身に在り」を思わせる。

亡き妻を追慕する心が形見の子と、妻の代わりとなる新しい女君を求めるのは、源氏の父桐壺帝にも見られる。『長恨歌』では、先の「旧き枕故き衾」の詩句の後、方士は楊貴妃の魂を蓬萊宮に尋ね当て、形見の品を持ち帰る。葵巻では、亡き葵上の魂に逢うことはできないが、源氏の追慕の心が、形見である若君への慈しみと紫上との新枕に慰められることに向かうと考えられる。

四、「亡き魂ぞ」の歌と六条御息所の「魂」

ここで改めて「亡き魂ぞ」の歌の意味するところを考えてみたい。その際に六条御息所の存在は、その生霊が葵上

を死に至らしめたという点で重要である。葵巻では、御息所の懊悩する姿と葵上の物の怪に悩む姿とが交互に描かれている。さらに二人に対する扱いについて、源氏は桐壺院から訓戒を受けたこともあった（紅葉賀一・三三四～五、葵二・一八～九）。御息所の使いが弔問の文を源氏に届ける場面は次のように描かれている。

深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、
とならはぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ほらけ
の霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍
の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。いまめかし
うも、とて見たまへば、御息所の御手なり。「聞こえ
ぬほどは思し知るらむや。」

人の世をあはれときくも露けきにおくるる袖を思
ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。（五一）
「朝ほらけの霧りわたれるに」は、源氏と中将が亡き葵上を偲ぶ場面の、「時雨うちしてもあはれなる暮つ方」と、朝と暮の空の様子を対応させていると見られる。また、御息所の、「ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」と、「風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して」は、共に空の様子に触発されたものである。文を受け取つ

た源氏の様子である。

過ぎにし人は、とてもかくても、さるべきにこそはものしたまひけめ、何にさることをさださだどけざやかに見聞きけむと悔しきは、わが御心ながらなほえ思しなほすまじきなめりかし。斎宮の御浄まはりもわづらはしくやなど、久しう思ひわづらひたまへど、わざとある御返りなくは情なくやとて、紫の鈍める紙に、「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへ怠らずながら、つつましきほどは、さらば思し知るらむとてなむ」とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜずもやとて、これにも」と聞こえたまへり。（五二）

源氏は、御息所が生霊となったことを暗に咎めて、この世に執着するのははかないこととし、忘れてほしいと言っている。亡き葵上についても、中将は、「女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」と言っていた。また御息所は、「人の世をあはれ」とし、源氏も「とまる身も消えしも同じ露の世」と、共に無常の世としている。源氏は先の場面で「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」と口ずさんでいるが、その基になった劉詩には、その

前の句に、「相逢ふも相笑ふも尽く夢のごとし」とあり、そのような認識が源氏にあるとは言えるであろう。源氏の返事を受け取った御息所は、「なほいと限りなき身のうさなりけり、かやうなる聞こえありて、院にもいかにおぼさむ」(二・五二・三)と生霊の噂を院がどう思うかと心配し、中将も、源氏の嘆く様子を見て、「あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院などゐたちてのたまはせ」(五・六)と、源氏の愛情が薄いのを院が心配していたことを思い出している。

御息所の生霊が葵上に乗り移り、その口を借りて源氏に訴える場面は、両者の関係が最も深いと言えるであろう。

あまりいたう泣きたまへば、心苦しき親たちの御事を思し、またかく見たまふにつけて口惜しうおぼえたまふにやと思して、「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともしけしうはおはせじ。いかなりともかならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」

となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよした
がひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見ず見す、世にはかかることこそはありけれと、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るもかたはらいたう思さる。

(三九〇)

御息所の魂が源氏の許に来たのは、「もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」、また「なげきわび空に乱るるわが魂」とあるように、源氏との仲を思い悩んで魂が身から抜け出たためである。亡き葵上の魂も、中将は、「女にては、見棄てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」と、源氏の美貌に執心を残すと見ている。いずれも魂の執着する姿であると言えよう。しかし、御息所の「魂」が「あくがるもの」とし、また「空に乱るるわが

魂」とするのに対し、葵上の「亡き魂」が共寝の「床」から「あくがれがたき」とするのは、魂のあり方として対照的であるだけではない。御息所の「魂」は、源氏に衣の「し

たがひの棲」を結んで「結びとどめよ」と訴えるが、源氏は御息所が生霊となったことを疎ましく思っている。一方、亡き葵上の「亡き魂」には、共寝の「床」を「あくがれがたき」と思つて悲しんでいる。生死の違いはあるにしても、源氏の両者への関わり方は対照的である。

御息所の「魂」は、もう一つの側面を持っている。

この御生霊、故父大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛くいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度重な

りにけり。あな心憂や、げに身を棄ててや往にけむと、うつし心ならずおぼえたまふをりもあり、

(三五六)

御息所が物の怪となつて葵上を襲つたのは、御禊の日に侮辱されたことが原因となつている。葵巻の車争いと、『楊太真外伝』に見える楊家一行と玄宗皇女広寧公主一行との争いとの関連が指摘されている。^(注20)とすれば、御息所と葵上は、楊貴妃を扱つた物語との関連においても接点を有することになる。御息所の「もの思ひにあくがるなる魂」は、ここでは葵上を襲っている。従つて、御息所の「魂」は、源氏に訴える面と、葵上を襲う面と二つの面がある。夕顔巻の「いとをかしげなる女」は、源氏に訴えると同時に、夕顔を襲っている。これは源氏の夢の中でのことである。葵上を襲うことは、御息所が夢に見、「げに身を棄ててや往にけむ」(身を棄てて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり)『古今集』卷十八・雑下、躬恒による)と思ひ当たるふしがある。しかし、源氏が御息所の「魂」と語り合う場面は、夢ではなく現実のことである。このように御息所の「魂」の働きとして、葵上を襲うことと、源氏と直接語り合うこととの二つに分け、しかも後者を現実のこととしたのである。それは、御息所の「魂」が源氏と直

終 わ り に

接語り合う場面を、二人の物語の到達点として強調するためであろうが、一つには和歌に基づく「身を捨ててや往にけむ」という葵上を襲う働きに対して、『長恨歌』の蓬萊宮における楊貴妃の魂との対面に想を得て、源氏と直接語り合う場面を構成したためと考えられる。先の場面で、源氏は声や様子が葵上と違ってのことから御息所と思い当たるが、そう思いたくなくて再度聞き返して確認している。このことは、『長恨歌』で、太真が方士に二人に馴染みの品を託し、さらに二人だけの間に交わされた誓いの言葉を託けていることを思わせる。

「亡き魂ぞ」の歌は、「亡き魂」に直接向き合い、「君なくて」の歌は、亡き葵上に訴えているようである。このことは、先の御息所の「魂」と語り合う場面と類似する。特に、「旧き枕故き衾、誰と共にか」に対して「亡き魂ぞ」の歌が詠まれたのは、葵上の「亡き魂」を共寝の「床」から「あくがれがたき」と悲しむのに対して、御息所の「魂」が身から抜け出て空を飛び迷っていることと対応させたものと考えられる。これは二人の女君に対する源氏の関わり方の違いを如実に示すものとなろう。

葵巻の『長恨歌』詩句に詠まれた源氏の二つの歌は、「亡き魂」の悲しみを思い、また亡き葵上に訴えているようである。これは『長恨歌』において方士が楊貴妃の魂に對面する場面の翻案と見ることができる。『長恨歌』では葵巻に引かれた詩句の直後、方士が楊貴妃の魂を蓬萊宮に捜し当て對面するのである。葵巻でも「君なくて」の歌を契機として、源氏の葵上追慕の心が若君への慈しみと紫上との新枕に向かうことを示唆する。またこの源氏の二つの歌は、同じく『長恨歌』の同場面の翻案と見られる、御息所の「魂」と語り合う場面と対応している。そして「亡き魂ぞ」の歌は、葵上の「亡き魂」が共寝の「床」から「あくがれがたき」ことを悲しむものであり、それは御息所の「魂」が身から抜け出て空を迷うことと、生死の違いはあっても源氏と深く関わった二人の女君の魂が源氏に執着する姿として対応させられている。同時に、源氏の二人の女君に対する関わり方が異なっていることを示している。

これを『長恨歌』全体との関わりに広げて見ると次のようなことになる。桐壺巻において、帝は桐壺更衣の「魂のありか」を捜し当てることができず、結果として形見であ

る源氏と、身代わりとしての藤壺宮の登場をもたらすことになる。一方、帝が更衣一人を寵愛することによって、更衣は弘徽殿女御を始めとする他の妃達の嫉妬・迫害を受け死に至る。葵巻においても、源氏の葵上追慕の心は、やはり形見である若君と身代わりとしての紫上に向かうことになる。また、これを女君の側から見ると、葵上の「亡き魂」と御息所の「魂」は同じく源氏に執心を留めることによって、むしろ女君の方に「長恨」が残ることを示したものである。特に、御息所の「魂」は、源氏が厭わしく思っているのを、遂に鎮まることはないと考えられる。このような源氏をめぐる二人の女君の関係は、紫上と、死後源氏の夢に現われて恨む藤壺宮、また女三宮と、宮降嫁の三日の夜に、源氏の夢に現われた紫上のように、源氏が生涯にわたって負い続ける問題となる。

(注)

- (1) 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）により、冊数・頁数を示す。以下同じ。
- (2) 中西進著『源氏物語と白楽天』「七 葵」一〇四頁 岩波書店 一九九七年七月
- (3) 丸山キヨ子著『源氏物語と白氏文集』一五四頁 東京女子大学学会 一九六四年八月

(4) 注2の中西氏著書「一 桐壺」二二頁

(5) 注2の中西氏著書「七 葵」九八頁

(6) 藤井貞和著『源氏物語論』第十四章 源氏物語と中国文学 五九五頁 岩波書店 二〇〇〇年三月

(7) 流布本は後句「翡翠の衾は寒くして誰と共にせむ」。新編日本古典文学全集頭注には、「ただし「翡翠の衾は寒くして」を「旧き枕故き衾」とするのは、古い本文とみられる」（二・六五頁。なお同書「漢籍・史書・仏典引用一覧」五一〇頁参照）とある。なお『長恨歌』の引用は、同書一付録による。

(8) 注5に同じ。九九一〇〇頁

(9) 『百番歌合』五十八番 哀傷部（左 源氏物語 右 狭衣物語）には、この歌に、「一条の宮にて」として、「塵つもる古き枕を形見とて見るも悲しき床の上かな」の歌が合わされている。（『王朝物語秀歌選（上）』（岩波文庫）による。）

(10) 玉上琢彌著『源氏物語評釈 第二巻』には、「源氏の本文は、別本の御物本が「しげし」とある以外は、すべて「しろし」であり、作者の記憶ちがいか、それとも意識的に改めたかのいずれかであろう。「白し」と改めたとすれば、「霜の華重し」よりも、「霜の華白し」の方が、和歌には自然に感じられたのであろうか（四六二頁）とある。

(11) 『古今集』の引用は、『新編国歌大観 第一巻勅撰集編』（角川書店）による。以下同じ。この歌は、他に『古今六帖』六なでしこ、三句「植ゑしより」、「和漢朗詠集」上前載、

三句同上 躬恒 として取られている。

- (12) 『後百首歌合』八十番(左 源氏物語 右 心高き)では、この歌に、「尽きせぬことをおほしめし嘆きけるころ」として、「もし火の尽くるをきはに眺めつつまじろまぬ夜を幾夜経ぬらむ」の歌が合わせられている。

- (13) 『伊勢集』、『大式高遠集』の引用は、『新編国歌大観 第三卷私家集編Ⅰ』(角川書店)による。群書類従本は、五句「思ひかけきや」。

- (14) 拙稿「桐壺巻の『長恨歌』と和歌との関係」広島女学院大学国語国文学誌 第三十一号 二〇〇一年十二月

- (15) 『伊勢集』の『長恨歌』受容については、関根慶子・山下道代共著『伊勢集全釈』(風間書房 一九九六年二月)に、「この伊勢の長恨歌屏風歌も、一種句題的性格を持つ詠作であった。しかし伊勢は、原詩の詩句や叙述の順序にはさほどとらわれず、事を叙するというよりも、玄宗・楊貴妃になり代ってその情を述べる、という姿勢で詠んでいる」(一四二頁)とある。また、山崎誠「平安朝の和歌・物語と長恨歌」伊勢集・高遠集・道済集・道命阿闍利集及び宇津保・源氏物語を廻って―(中世文藝四十九 一九七一年三月)に、「伊勢集の長恨歌受容の趨勢は、玄宗の追慕と楊貴妃太真の深い嘆きにある。このことは、高遠・道済・道命法師の場合にも共通するように思われる」とある。

- (16) 玉上琢彌著『源氏物語評釈 第二卷』四六三頁
(17) 『道済集』でも、「当時好士」が『長恨歌』の句題を和歌

に詠んでいるが、その十首の順序は『長恨歌』の展開に従っている。前半五首は、楊貴妃がまだ深窓に在ることから玄宗がその死を悼むところまで、後半五首が、方士が楊貴妃の魂を尋ねることから尽きない恨みを述べるところまでである。これは『大式高遠集』の或る人の歌の構成と類似している。基本的には『長恨歌』の詩句によりながら、情景や心情の表現において外れるところがある。『道命阿闍利集』では、三首続いて『長恨歌』が歌に詠まれ、楊貴妃が深窓に在ることからその最後の場所を玄宗が再び訪れた悲しみまでである。また帝が元の所に帰って泣いているところに詠んだ歌が一首ある。

- (18) 劉禹錫の「嗟く所あり、二首(七言絶句)」及び『文選』「高唐賦」の引用は、新編全集二付録による。

- (19) 『万葉集』の引用は、『新編国歌大観 第二卷私撰集編』による。

- (20) 高木博著『長恨歌襟記』終章 長恨歌と源氏物語 二〇四―五頁。双文社出版 一九八八年十一月